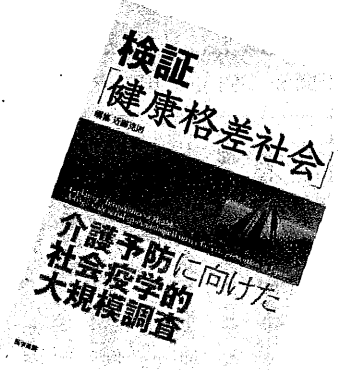


この一冊



「検証 健康格差社会」

近藤克則 編集

医学書院 本体4200円+税

本書は、編者である近藤克則氏の著書『健康格差社会——何が心と健康を蝕むのか』（医学書院、2005年）に続いて、所得格差の健康面への影響を明らかにした大変重要な一冊である。

本書では、約3万3千人の高齢者を対象とした大規模調査を素材として、日本の高齢者の実態が分析される。介護予防で注目される、うつ、口腔ケア・低栄養、生活習慣・転倒歴、閉じこもりなどを、その背景となる趣味や世帯構成、地域組織への参加や社会的サポート、就労などの状況とともに明らかにしている。

さらに、本書を特徴づけるの

は、上述のような状況に、所得、教育年数といった社会経済的地位が影響していることを、データによって示していることである。例えば、「うつ状態」は、所得が最低群の男性では、最高群に比べて6・9倍も多いという。

「格差社会」という言葉をよく耳にするようになって久しいなか、所得の高低が、生活面にさまざまな影響をもたらすことは、当然予想できることである。しかし、それが健康面にまで及んでいることをデータによって示されると、やはり衝撃的である。

本書は、統計的分析によって、どの程度の「健康格差」が存在しているのかを明確にすることに

で、今後の政策判断に材料を与えることを一つの目的としており、とくに高齢者の介護予防戦略を見直すうえで、示唆に富んだ報告集となっている。

また、地域差、とりわけソーシャル・キャピタルの差異に着目している点も特徴である。所得格差と健康格差の連関が示されたとして、それらがすべて「自己責任」に帰せられてしまうことは望ましくない。

地域のソーシャル・キャピタルに注目する本書の分析は、健康とは個人的ないしは生物医学的なものばかりであるのではなく、社会との関わりによって成り立っているものであることを十分に伝えている。

他方で、それは、個人の主観的な健康感を軽視するものではない。地域組織への参加や就労が、高齢者自身の健康感による影響をもたらすことを示しつつ、そのような場へのアクセスが、所得や教育年数の低い層ほど困難である状況を問題化し、社会疫学的な分析の重要性を提起しているのが本書なのだ。

各章はそれぞれ、学術的な調査研究論文となっているが、専門用語を解説したコラムも豊富であり、幅広い読者層に読みやすい工夫がなされている。

「経済的には貧しくても、生活や健康面では豊かな農村」というような、ある種のノスタルジックなイメージは、多くの人が抱いているものかもしれない。本書は、このイメージを裏切る。だがそれは、お金が全て、という意味ではない。ノスタルジーを離れて、現在の問題をみつめ、これを打開していこうという強いメッセージが本書からは伝わってくる。

ぜひ一読して欲しい。

検証「健康格差社会」

介護予防に向けた社会疫学的大規模調査

近藤 克則 編

(評者) 中山 健夫 (京大大学院教授・健康情報学)

疫学の知識を深め視野を広げるために



近年、公衆衛生、疫学の世界で、社会疫学 (Social Epidemiology) への関心が急速に高まっている。日本国内でも、ここ数年、ハーバード大学の Ichiro Kawachi 教授、ロンドン大学の Michael Marmot 教授など、この領域の世界的指導者が数回にわたって来日されている。「格差社会」という言葉はすでに日常用語になってしまったが、この問題にいち早く科学的に切り込んだのが、この社会疫学であった。このたび、近藤克則教授による『検証「健康格差社会」 介護予防に向けた社会疫学的大規模調査』を拝読し、国内における社会疫学の発展が、予想した以上に早く、そして期待以上に大きな形で具体化しつつあることに、驚嘆と感慨を覚えた次第である。

本書の内容は、近藤教授と日本福祉大学を中心として進められている大規模疫学研究“AGES (Aichi Gerontological Evaluation Study)”の一部である。2003 年度に 3 県 15 自治体で収集された高齢者 3 万 2891 人の心理社会的要因や健康状態に関する膨大なデータの横断的検討により、

- 1) 日本の高齢者の身体・心理・社会的な実態を示すこと
- 2) 社会疫学的に重要な因子の分布を記述すること
- 3) それらの因子間の関連を示すこと
- 4) それらの所見に地域差がどの程度見られるかを明らかにすることが試みられている。

各章で「主観的健康観と抑うつ」「生活習慣・転倒歴」「歯・口腔・栄養状態」「不眠」「ストレス対処能力」「趣味活動」「閉じこもり」「虐待」「家族生活」「地域組織への参加」「社会的サポート」「就業状態・経済的不安」「ソーシャル・キャピタル」「介護予防」など、きわめて幅広い視点から分析と解説がなされており、いずれも読み応え十分である。社会経済的地位による「健康格差」は最大 7 倍に達するという驚くべき知見を、今日の政策決定者が、事実をして語られた警鐘として、真剣に耳を傾けるようお願いしたい。

本書の特筆すべき点は多くあるが、その一つとして、充実したコラムがある。「一般線形モデルとは?」「ソーシャル・キャピタルの定義と測定」「a compositional explanation & a contextual explanation」「マルチレベル分析」「4つの錯誤 (fallacy)」など14のコラムは、疫学の基本的知識を持つ読者が、知識をさらに深め、視野を広げていくのに大いに役立つに違いない。また本書の編集に際し、各章を投稿論文に準じて、外部研究者の査読に委ねた近藤教授の見識に敬意を表したい。私も微力ながらお手伝いさせていただいたが、多くの協力者が、この取り組みに研究者としての誠実さを感じたことと推測している。

本研究は、横断的検討をさらに充実させ、各課題が原著論文として完成されていくであろう。現在進行中とされている追跡研究の成果も大いに待たれる。長期にわたる、辛抱強く着実な取り組みだけが、それらの大きな成果を生み出していく。近藤教授、そしてこの研究グループの方々であれば、それを必ず成し遂げていかれるものと信じている。

私自身、貴重な勉強の機会をいただいたことに感謝しつつ、本書を公衆衛生学関係者、疫学者、そして「格差」問題に関心を持つ多くの方々に、必読書として推薦させていただくものである。

B5・頁 200 定価 4,410 円(税 5%込)医学書院

ISBN978-4-260-00432-9